

ASA KE  
**朝氣遺跡（第34次）**

—西甲府住宅地点 発掘調査報告書—

2006年3月

(株) 西甲府住宅  
甲府市教育委員会  
(財) 山梨文化財研究所

ASA KE  
**朝氣遺跡（第34次）**  
—西甲府住宅地点 発掘調査報告書—

**2006年3月**

(株) 西甲府住宅  
甲府市教育委員会  
(財) 山梨文化財研究所

## 序

本市は県中央部に位置し、南北に細長い市域であります。標高2500mを超える亜寒帯から標高250mの盆地低平地まで多様な自然環境が存在し、豊かで多彩な文化が育まれてきました。市域には364箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在し、連綿と営み続けた生活の痕跡が数多く残されております。郷土の歴史・文化を理解し、さらには故郷を想い、誇りに思えるよう、当教育委員会ではこれら文化財を保護するとともに、後世へ正しく伝えるため保存・啓蒙活動に取り組んでいるところであります。

本書は平成17年、甲府市朝氣1丁目地内において実施した朝氣遺跡の発掘調査報告書であり、財団法人山梨文化財研究所の協力を得て記録の保存措置が講じられました。本遺跡は、かつて東小学校遺跡とも呼ばれ、昭和42年の発見以来、多くの調査が積み重ねられ、多彩な遺物とともに多大な成果を挙げてまいりました。今回の調査成果にもとづき、地域の歴史に新たなページが加わり、豊かな実像が提示できることと思われます。本報告書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となればこの上ない喜びであります。

末筆となりましたが、調査に際し、貴重な文化遺産に対する深いご理解を賜り、ご支援・ご協力を頂いた株式会社西甲府住宅及び発掘から報告書刊行まで労をいとわず精力的に業務を遂行していただきました財団法人山梨文化財研究所のスタッフはじめ関係各位に、感謝申し上げるとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

甲府市教育委員会

教育長 角田智重

# 例 言

# 本文目次

- 1 本書は山梨県甲府市朝氣1丁目229-1番地ほかに所在する朝氣遺跡第34次発掘調査報告書である。  
(株)西甲府住宅による宅地分譲地開発に伴い、2005年3月に発掘調査が実施された。
- 2 本調査は、甲府市教育委員会による試掘調査を経て、(財)山梨文化財研究所が甲府市教育委員会の指導に基づき実施した。
- 3 本書の原稿執筆・編集は山梨文化財研究所 櫛原功一が行った。なお本報告では、甲府市教育委員会による試掘結果もあわせて報告する。
- 4 発掘調査における基準点設置、グリッド杭打設業務は(株)フジテクノに委託した。
- 5 本書に関わる出土品、記録類は甲府市教育委員会で保管している。
- 6 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご指導、ご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)。  
戸山克己(株西甲府住宅)・三澤博章(南ミサワ)・信藤祐仁・伊藤正彦(甲府市教育委員会)・甲府東小学校・渡辺一夫(渡辺井戸工業所)・塙谷風季(国学院大学人文学院)・西本豊弘(国立歴史民俗博物館)

# 凡 例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点:北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。真北方向角は-0° 02' 52"。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。  
遺構—任意  
遺物—全1/3
- 3 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準十色帖』(1991年度版)を使用した。
- 5 遺物図版番号は遺物観察表番号と一致する。
- 6 本書図1は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」、図2は1/25,000地形図「甲府」、図5は甲府市内1/2,500都市計画図を使用した。
- 7 本文の引用文献については、最終章末の引用参考文献にまとめた。

## 例言

## 凡例

## 本文目次

## 抑因目次

## 写真目次

## 表目次

## 写真図版目次

第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 屈序	8
第3節 遺構	8
第4節 遺物	14
第5節 遺構外遺物	18
第6節 獣骨類	18
第4章 総括	21
引用参考文献	
報告書抄録	

# 挿図目次

図1 遺跡の位置	4
図2 遺跡の位置	4
図3 朝氣遺跡調査地点	5
図4 甲府市内の遺跡	6
図5 調査地点	7
図6 遺構全体図	7
図7 本調査地点全体図	9
図8 1号周溝墓と周辺	10
図9 試掘坑	11
図10 遺物出土状況(1)	13
図11 遺物出土状況(2)	14
図12 遺物(1)	15
図13 遺物(2)	16
図14 遺物(3)	17
図15 遺物(4)	18

## 写真目次

写真1 試料1 (1) .....	19
写真2 試料1 (2) .....	19
写真3 試料2 .....	19
写真4 試料3 .....	19
写真5 試料4 .....	19

## 表目次

表1 朝氣遺跡の調査経緯 .....	3
表2 土器類観察表 .....	20
表3 土製品観察表 .....	20
表4 石器観察表 .....	20

## 写真図版目次

図版1 1 - 1	調査前
1 - 2	重機による表土剥ぎの状況
1 - 3	1号溝内調査風景
1 - 4	1号方形周溝墓調査風景
1 - 5	1号周溝墓遺物出土状況および作業風景
1 - 6	1号周溝墓遺物出土状況
1 - 7	1号周溝墓横断面写真
1 - 8	1号周溝墓溝内の炭化物層
図版2 2 - 1	3号溝付近調査風景（北から）
2 - 2	3号溝内土師器出土状況
2 - 3	3号溝内土師器出土状況（35・37）
2 - 4	3号溝内土師器出土状況（34）
2 - 5	3号溝内土師器出土状況（38ほか）
2 - 6	3号溝内土師器出土状況（38）
2 - 7	1号周溝墓溝内土師器出土状況
2 - 8	1号周溝墓調査風景
図版3 3 - 1	1号周溝墓溝内馬齒出土状況
3 - 2	1号周溝墓溝内骨出土状況
3 - 3	遺跡全景（北から）
3 - 4	北側下層の状況（北から）
3 - 5	遺跡全景（南東から）
3 - 6	1号周溝墓完掘状況（南から）
3 - 7	甲府東小学校児童の遺跡見学の様子
3 - 8	遺跡見学の様子
図版4 出土遺物 (1)	
図版5 出土遺物 (2)	
図版6 出土遺物 (3)	

## 第1章 経過

### 第1節 調査の経過

朝氣遺跡は、甲府市朝気に所在する古墳時代から平安時代の集落遺跡である。甲府盆地中央の盆地低部に位置し、甲府市立東小学校付近を中心に、東西700m、南北500mの広範囲が「朝氣遺跡」として周知されている。甲府市中心部に近い本地域は住宅地、商業地として都市化が著しく、道路建設、宅地開発などが盛んである。

2005年2月、この遺跡の一角にあたる朝氣1丁目地内において、(株)西甲府住宅により宅地分譲が計画され、甲府市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、溝内から古墳時代の土師器が多数出土し、本調査の必要性が指摘された。

2005年3月、(有)ミサワより山梨文化財研究所に調査依頼があり、協議の結果、平成17年3月8日より発掘調査に着手することとなった。

### 第2節 発掘作業の経過

試掘調査は、2005年2月に甲府市教育委員会によつて実施された(調査担当 伊藤正彦)。開発予定地内に東西、南北方向のトレンチ2本が設定され、調査が行われた(1・2号トレンチ)。1号トレンチでは、東寄りのところから幅約3mの溝の一部が見つかり、中央付近からピット2本が検出された。トレンチ西側は擾乱が著しく、遺構は検出されていない。2号トレンチでは、中央付近から幅約4mの4号溝が検出され、土師器甕の大型破片(古墳時代)が出土したほか、いくつかの溝の存在が明らかになった。以上により、開発予定地内では西側に擾乱が存在するものの、全面的な遺構の分布が想定された。

発掘調査は2005年3月11日より3月31日まで、実施された。開発予定図面をもとに、甲府市教育委員会の判断により、敷地中央北側の取付道路(6×23m)の範囲を対象として本調査が実施されることとなった。

発掘担当者 柳原功一(山梨文化財研究所 研究員)  
発掘参加者(五十音順、敬称略)

荒木昭彦、金井いく代、久保田明義、倉田勝子、佐田金子、土屋健作(国学院大学大学院生)、初鹿野博之(東京大学大学院生)、渡辺茂  
発掘調査の経緯は次のとおりである。

2005年3月11日(金)

調査初日。重機により表土除去。

3月14日(月)

器材搬入。事務所設置。調査区内、壁面精査。基準点杭設置。壁面の土層観察。

3月15日(火)

鍛錬かけ、遺物取り上げ、試掘坑の再掘削。

3月16日(水)

溝の掘り下げ。遺物取り上げ。

3月17日(木)

溝の掘り下げ。途中雨で中止。

3月18日(金)

溝の掘り下げ。遺物取り上げの繰り返し。馬齒出土。

3月22日(火)

溝の掘り下げ。甲府東小6年生約80名見学。

3月23日(水)

溝の掘り下げ、遺物取り上げ。溝が屈折することが推測される。

3月24日(木)

午前中に甲府東小4年生約100名、午後、5年生約70名見学。溝は方形周溝墓と判明する。

3月25日(金)

骨の実測、取り上げ。

3月29日(火)

方形周溝墓内の掘削はほぼ終了。周辺のピットなど調査。

3月30日(水)

北側の拡張区掘り下げ。遺物が多く出土。

3月31日(木)

調査区内、周辺清掃。完掘状況写真撮影。調査区内のレベル計測。事務所返却。器材撤収。本日にて現場調査終了。

### 第3節 整理等作業の経緯

遺物整理は調査終了後、山梨文化財研究所内で進められた。遺物の水洗、注記、接合ののち、実測、トレース、版組、観察表作成の順で実施された。

整理担当(報告書作成) 柳原功一

整理作業員 佐野靖子、柳本千恵子

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本遺跡は甲府盆地中央北側、盆地底部の沖積地に位置し、濁川と荒川にはさまれた標高258mの微高地上に広がり、荒川、相川が作り出した扇状地の扇端に位置する。現状では甲府市立東小学校を中心とする平坦地で、周囲には大型店舗をはじめ、商店街、個人住宅が密集する。

今回の調査地点は、遺跡の中央北寄りにあたり、東小学校北西、熊野神社北側の市道交差点の角の旧宅地である。西側には市道善光寺敷島線が南北に通過する。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、青沼遺跡、伊勢町遺跡、幸町遺跡などが分布し、盆地底部にあって比較的濃密な遺跡分布がみられる(図3)。なかでも本遺跡は規模が大きく、弥生時代から平安時代にわたる拠点的な集落遺跡と考えられ、古代「青沼郷」の中心地と想定されている。

遺跡の存在が初めてわかったのは昭和42年(1967)で、市立東小学校校庭に下水管を敷設した際に土師器が出上したことから、当初「東小学校校庭遺跡」として遺跡登録された。昭和51年(1976)、小学校校庭を南北に横切る下水管設工事が予定されたため、その事前調査として初めて本調査が実施された。その結果、古墳時代の良好な土器群とともに竪穴の窓らしき施設、溝が検出され、集落の一端が明らかになった。また旧地形は河道によって起伏に富む低湿地性の遺跡であったことがわかり、自然木、楓の出土も報告されている。遺跡の広がりは校庭を越えて広範囲に及ぶことが推測されたため「朝氣遺跡」と改称され、遺跡範囲はほぼ今日の朝気遺跡の広がりとして認識され、報告書内で図示されている。

その後、昭和52年と59年の東小学校の校舎建替えに伴い2・3次調査が実施され、弥生末～古墳後期の竪穴、土壙のほか、河道脇から護岸状杭列が見つかるなど、大きな成果を上げた。特殊遺物としてはガラス玉のほか下駄、櫛、鳥形などの多彩な木製品が出土し、各種栽培植物の種実の存在も注目されている。

昭和59・60年には東小学校西側、市道善光寺敷島線新設に伴う4・5次調査が実施された。古墳時代後期から平安時代の竪穴のほか、護岸のためのシガラミ

状構造、古墳前期の大溝、弥生末の合わせ口甕棺、平安時代の仰臥葬の人骨などが検出され、大溝からは人形、田舟などの木製品の特殊遺物が出土している。また石英製巡方、縁袖陶器の出土もあり、古代青沼郷の中心的な集落にふさわしい遺物もみられる。シガラミ状構造については水田城に引かれた用水路の護岸施設と考えられている。

その後、道路拡張工事、個人住宅建設などに伴って朝氣遺跡内では各地で小規模な発掘、試掘調査、立会い調査が実施されており、今までに36次調査に及んでいる。各調査の内容は表1のとおりであるが、中でも注目されるのは7次調査で、弥生末から平安時代の水田畦畔が検出され、集落域の周囲に生産域としての水田が存在したことが確認されている。

今回の調査地点は、3年ほど前までは個人の宅地で、敷地の西半分には店舗を兼ねた主屋に付属して菓子工場がL字形にあり(木内製菓)、飴やせんべいなどのお菓子を製造・販売していた。東半分は畑地で、畑と家の間には北寄りに井戸があり、脇にポンプがあった。また西側の主屋と工場の脇にも井戸があった、ということを20年ほど前に井戸を掘ったという方からご教示いただいた。実際に、調査ではポンプの残骸、井戸1基を確認している。

本遺跡が所属したと考えられる青沼郷は、古代甲斐国北西部を占める広大な巨麻郡の東端にあたる。「和名抄」では「安乎奴末」「安乎奴萬」と記載され、現在の甲府市青沼1～3丁目が遺跡とされている。正倉院宝物中、「太狐兎面袋白縞裏」に「(甲斐)国青沼郷物部高嶋調輪匣坪」とあり、奈良時代にはすでに巨麻郡青沼郷が存在していたことが確認できる。中世にも「青沼郷」として文書に地名があり、近世には東青沼村、西青沼村となった。近代になるとすべて甲府市域となり、近年の地名改称で東青沼町(旧東青沼村)の大部分が青沼1～3丁目となったほかは、消滅したという(磯貝1991)。したがって古代青沼郷は甲府市西半から甲斐市旧敷島町方面まで広がっていたと考えられている。古代巨麻郡は甲府市中央を郡境としているが、これは甲府市加牟那塚の擁する甲府北西部の勢力を付体として建都されたからと考えられており、その勢力の中心は青沼郷ではなかったかといわれている。

## 表 1 朝氣遺跡の調査経緯

次	調査地名	調査年月	調査方法	調査者	遺物		調査記述	備考
					遺構	遺物		
1	東小学校遺跡(西) - 7月21日	[1967年7月]	人頭査	前田謙介ら	古墳時代 - 後期土器陶器、鐵物、骨角器、玉鏡	ト木出海波	ト木出海波	谷山他 1980
2	東小学校遺跡(西) - 7月21日	[1967年7月]	人頭査	前田謙介ら	古墳時代の墓穴、古墳周辺の土器、刀劍、刀劍を伴う土器、鏃、箭、古墳後醍醐天皇の水井の遺物	土壘、石棺、瓦片、ヒヨウシンガラス、鉄・銅・銀・銀削、刀劍木製柄、漆器	土壘、石棺、瓦片、ヒヨウシンガラス、鉄・銅・銀・銀削、刀劍木製柄、漆器	市史文科編
3	東小学校遺跡(西) - 7月21日	[1967年7月]	人頭査	前田謙介ら	古墳時代の墓穴、古墳周辺の土器、刀劍、刀劍を伴う土器、鏃、箭、古墳後醍醐天皇の水井の遺物	木製柄から削り取った土器、刀劍木製柄、漆器	木製柄から削り取った土器、刀劍木製柄、漆器	市史文科編
4	新見丁719	[1984年12月]	人頭査	前田謙介	古墳時代の墓穴、平安時代の窓穴、土壘、塹	2600	古墳時代の墓穴、平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
5	新見丁719	[1985年7～8月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	100	シガラガガラス、人形、人形、石造像、ヒヨウシンガラス、ヒヨウシンガラス	市史文科編
6	新見丁719(東小学校裏側)	[1995年11～12月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	180	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
7	新見丁719	[1995年11～12月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	625	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
8	新見丁718	[1995年7～8月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
9	新見丁718	[1995年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
10	新見丁718	[1995年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
11	新見丁718	[1995年11～12月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
12	新見丁7182	[1995年10月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
13	新見丁7182	[1995年10月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
14	新見丁7185	[1995年11月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
15	新見丁7174	[1995年12月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
16	新見丁7173	[1995年12月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
17	新見丁7281	[1996年2月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
18	新見丁724	[1996年2月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
19	新見丁723	[1996年2月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
20	新見丁711	[1996年2月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
21	新見丁711	[2000年3月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
22	新見丁7299-1	[2001年5月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
23	新見丁7285	[2001年5月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
24	新見丁7281	[2004年6月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
25	新見丁7281-17	[2004年6月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
26	新見丁71660-11	[2004年6月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
27	新見丁71669-4	[2004年6月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
28	新見丁71665-17	[2004年6月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
29	新見丁7234	[2004年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
30	新見丁7234-15	[2004年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
31	新見丁7182	[2004年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
32	新見丁7185-3	[2004年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
33	新見丁7185-5	[2004年7月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
34	新見丁7229-113小	[2005年3月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
35	新見丁7181-10	[2005年4月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編
36	新見丁7181	[2005年4月]	人頭査	前田謙介	平安時代の窓穴、土壘、塹	2400	平安時代の窓穴、土壘、塹	市史文科編

※ 漢字については、本稿書末の引用文献を参照



図1 遺跡の位置 (1/200,000)



図2 遺跡の位置 (1/25,000)

0 1000m

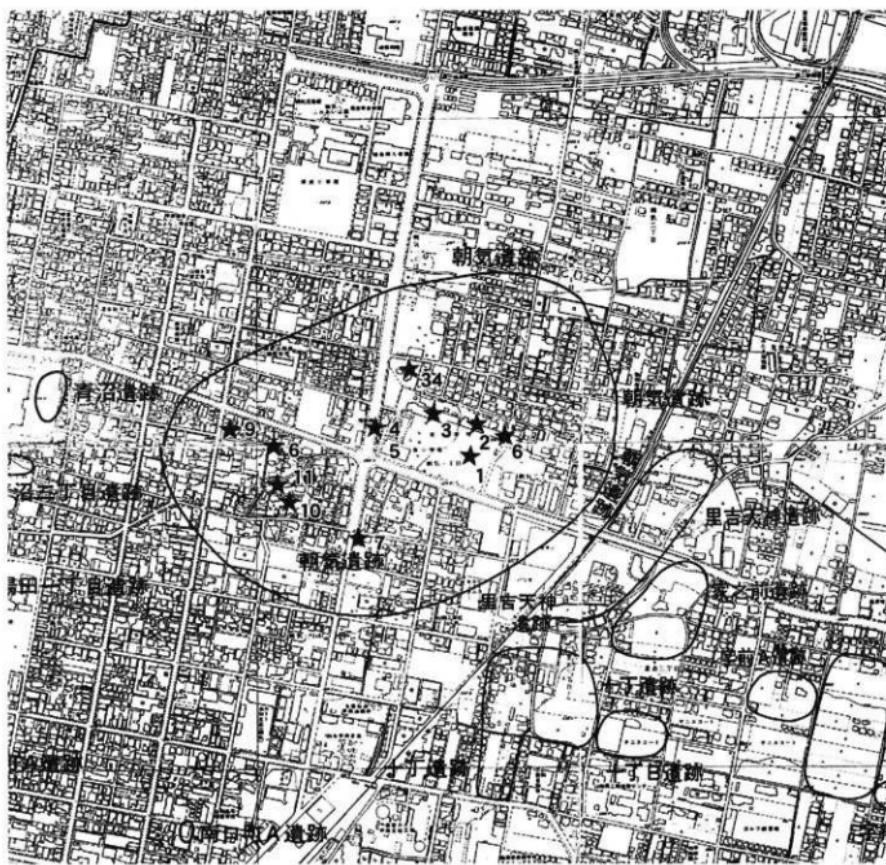


図3 朝氣遺跡調査地点（数字は次、『甲府市遺跡地図』に追加）

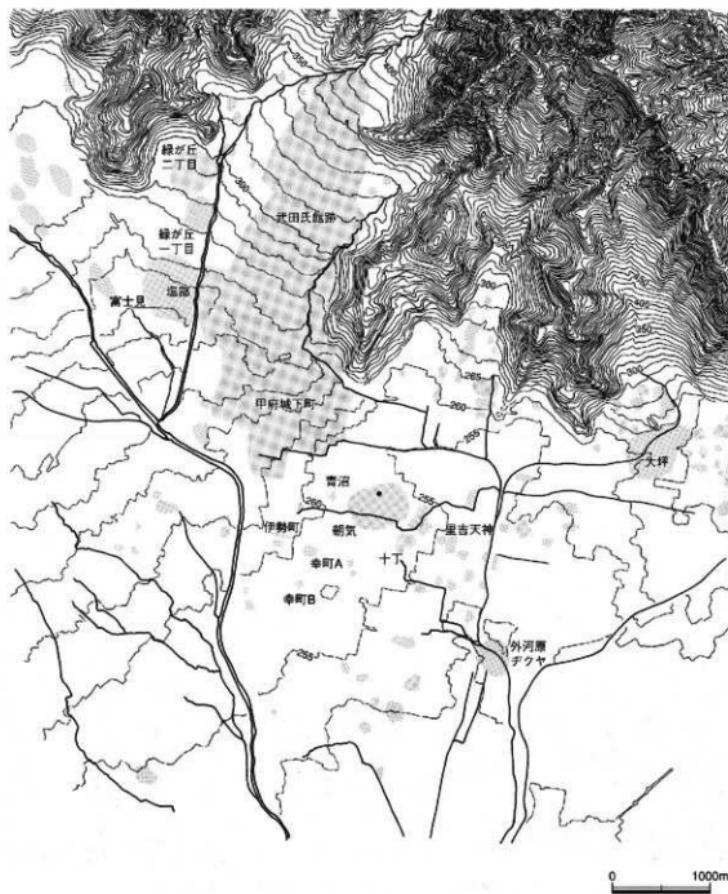
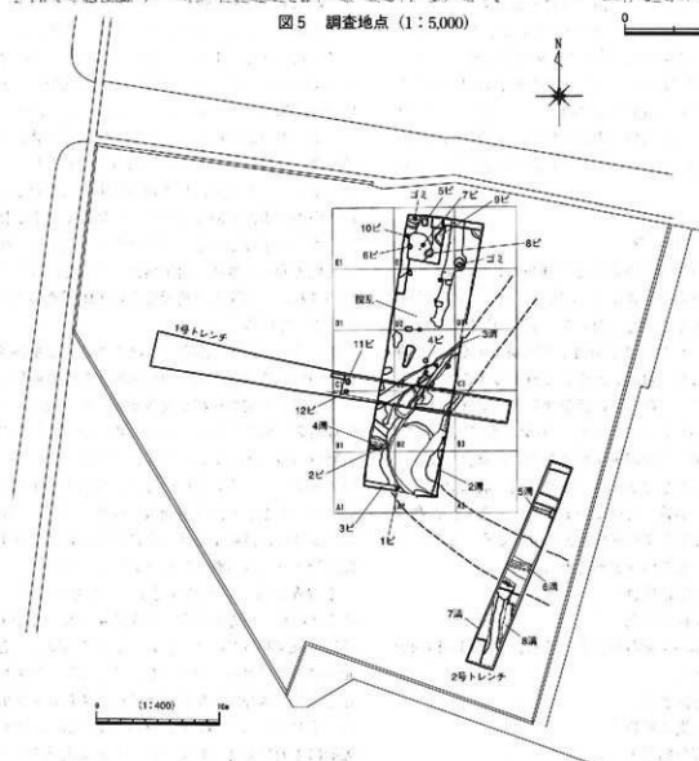


図4 甲府市内の遺跡 (1:50,000)  
(黒丸が調査地点)



### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

調査は試掘結果に基づき、深さ約80cm~1.2m付近の古墳時代後期の遺物包含層を中心に遺構確認を行い、一部に深掘りを行って地下2.4mまでの土層堆積状況、遺物の有無を確認した。また北側に関しては、古墳時代前期と思われる遺物の集中地点が調査終盤で見つかり、部分的な下層の調査を実施した。土層堆積状況については調査区の四周で確認し、東壁、北壁の2面の図化を行った。

平面図に関しては国家座標に基づく5mグリッドを設定し、南西のA1杭を(0:0)として光波測量機によって測量し、平面図中にX、Yによる測点を落とし、つなげて図を描くという手描きによる実測方法をとった。遺物については、台帳に通し番号でX・Y・Zの数値、出土地点、種別などのデータを記録した。その後、整理の段階で(株)アイシンの遺構実測支援システム「遺構くん」を用い、パソコンに遺構平面図、遺物データを取り込み、遺構図と遺物ドットを重ね、出土状況を検討した。本書の調査区全体図、遺物断面投影図などは、「遺構くん」でプリントした図面を用いている。

#### 第2節 層 序

本調査では調査区北壁および東壁の断面を精査し、断面観察を行った(図7)。北壁では深さ1.5mの上層遺構確認面までを確認したのち、下層の堆積状況を確認するため、中央付近に幅1mで2.4mの深さまで掘り下げたところ、水がしみ出して溜まる状態となつたため、それ以下の掘り下げは断念した。東壁では1号周溝墓の構内を含めて1~1.5mの深さまで確認した。その内容は図7の上層説明のとおりで、整合しない点もあるが、おおむね2面を対比して同一層に対しても同一層番号、名称を付けている。ピット覆土、搅乱などを除外して両者を整理すると以下のようになる。

1~2層 黄褐色~黒褐色土(表土)

3層 灰黄褐色砂質土

4層 褐灰色砂質土

5層 にぶい黄褐色粘質土(サビ分多く旧水田面床土か)

6層 褐色砂質土

7層 灰黄褐色粘質土

8層 黑褐色粘質土

9層 褐灰色砂質土

14層 にぶい黄褐色砂質土(上層遺構確認面)

15層 灰黄褐色砂

16層 灰黄褐色砂質土

17層 黒褐色粘質土

18層 黒色粘土

19層 灰黄褐色砂

20層 黑色粘土

なお、図8の試掘1号トレーンチ内の土層断面図および図9の試掘2号トレーンチ内の土層断面図は甲府市教育委員会による試掘時点での表土から周溝墓底部までの土層であり、本調査の層序と合わせていないが、大いに参考となる。

#### 第3節 遺 構

試掘調査では1・2号トレーンチの2本の試掘坑が調査された。1号トレーンチは幅2m、長さ29.5mと東西に長く、東端でトレーンチに直交する溝1箇所(1号溝)、中央付近にピット2本(1・2号ピット)が検出されている。中央から西半分については搅乱が著しく、遺構は確認されなかったようである。2号トレーンチは敷地内東寄りに幅2m、長さ18mで南北に設定され、上層で中央に東西方向の2号溝、北側で1号溝が検出され、さらに全体を掘り下げるに中央付近、2号溝下層に東西方向の4号溝、南北西側に南北方向の3号溝が検出され、4号溝の上端近くから土器部壺の大型破片が出土している。

この時点では1号溝と4号溝の関連性は指摘されていないが、両者の規模、逆台形を呈した断面形は類似し、本調査の結果を経て両者が同一の方形周溝墓(1号周溝墓)の溝であると判断した。なお本報告では試掘時点の遺構名をそれぞれ頭に「試掘」とつけて「試掘1号溝」というように呼称し、試掘1号溝は本報告5号溝、試掘2号溝は本報告6号溝、試掘3号溝は本報告8号溝、試掘1号ピットは本報告11号ピット、試掘2号ピットは本報告12号ピットとして報告する。

本調査では、進入路の範囲に合わせて22.7m×6mの南北に長い長方形の調査区を設定した。北壁中央付近に1m四方の深掘りを行い、土層を観察し、さらに北壁に沿って東西にサブトレーンチを入れて壁面の図化を行った。調査区北半には南北に青灰色の変色面があり、それに沿って木の杭5本が1.5~2.5mの間隔で直線的に1列打ち込まれていた。木杭は現地表面から約1mの深さから下に約20~30cmの長さで遺存するもの

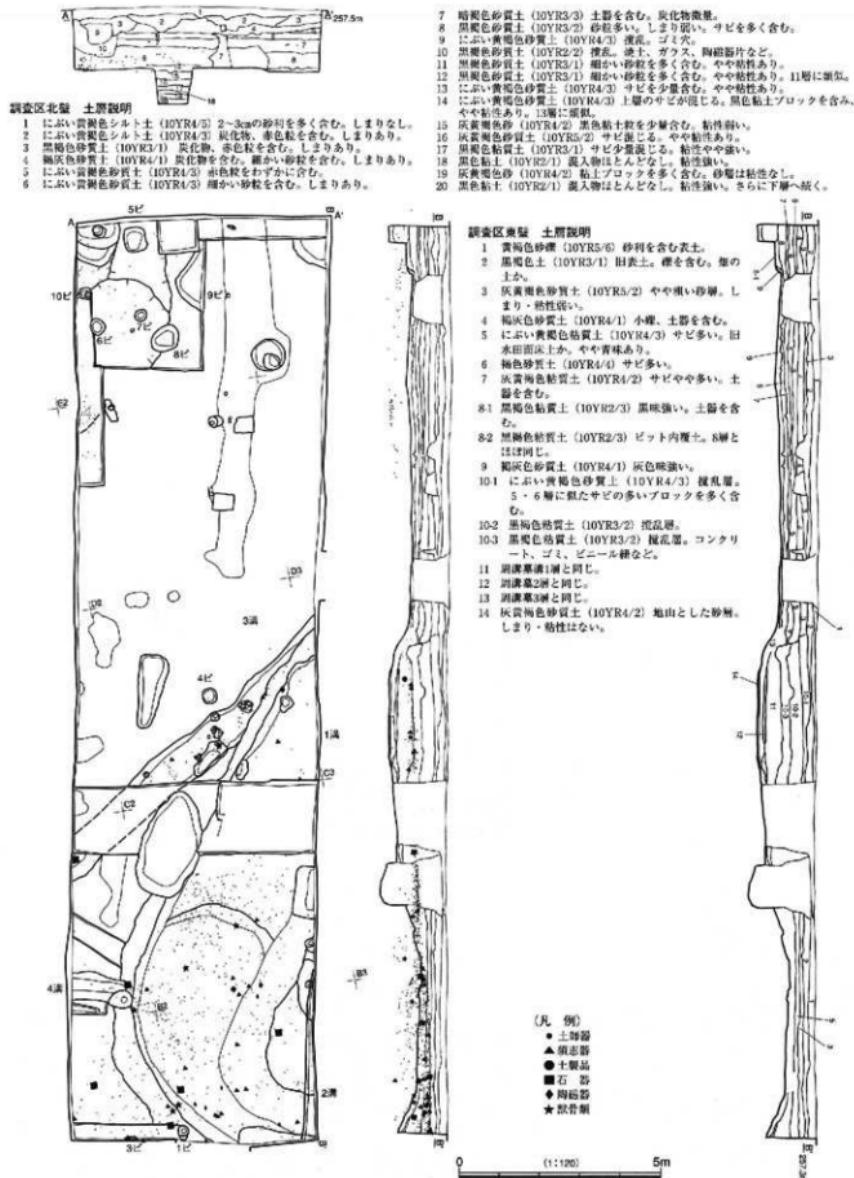
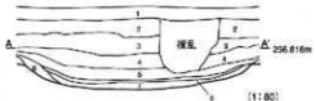


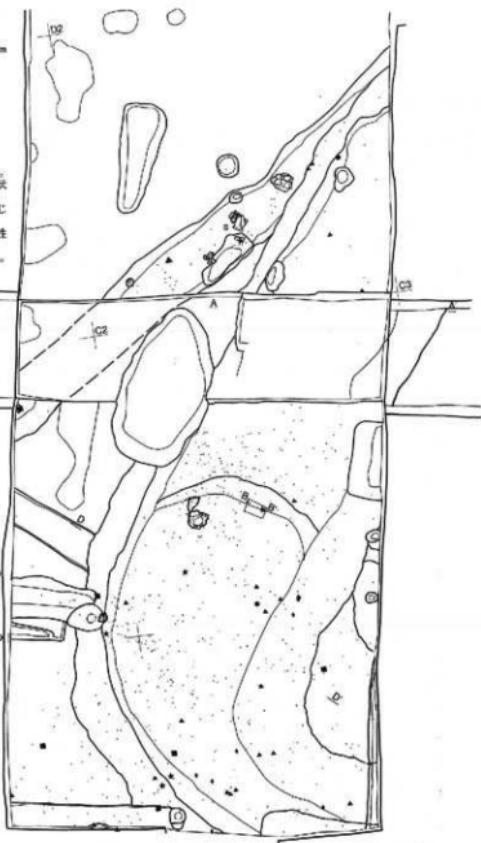
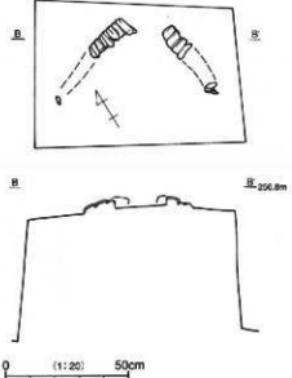
図7 本調査地点全体図



試験1号トレンチ内 方形周溝墓断面 土層説明

- 1 表土。
- 2 灰褐色土上。灰色土を塊状に混入。鉄分沈澱。旧水田底土か。
- 3 黒褐色土 塗色粘土を混入。極くよくしまる。
- 4 茶褐色土 漢化物、塗土が若干混じり、遺物を含む。しまり良好。
- 5 灰褐色粘土 漢化物、焼土を含み。黒色土、灰色土がブロック状に混じる。
- 6 灰色粘土 漢化物を含み、黑色土、灰色土がブロック状に混じる。軟性弱い。
- 7 黒色粘質土。灰色土が塊状に混じる。レンズ状堆積。緻密で粘性強い。
- 8 黑色土 灰色土、黑色粘質土がブロック状に混じる。しまりあり。

ウマ曰能



4号断面 土層説明

- 1 にかい黄褐色砂質土 (10YR5/4) サビと砂利の混じり。表土。
- 1-1 にかい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 硅土ブロック混じり。
- 2 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 下層にサビ堆积あり。
- 3 黄褐色砂質土 (10YR3/3) サビを含む。
- 4 黑褐色砂質土 (10YR3/1) 土細胞包含層。古墳時代の遺物堆积。
- 5 黑褐色砂質土 (10YR2/3) サビを含み、褐色味がある。
- 6 黑褐色砂質土 (10YR3/3) サビを含む。土器片を含む。
- 7 黑褐色砂質土 (10YR3/1) 黒褐色い粘土。サビ混入。炭化物あり。
- 8 にかい黄褐色砂質土 (10YR4/3) サビ多い。黄褐色砂質土ブロックを含む。
- 9 黑灰粘土 (10YR4/1) サビを含む。

1号方形周溝墓 断面 土層説明

- 1a 黄褐色砂質土 (10YR3/4) 土器片あり。赤色絞を含む。サビあり。炭化物を含む。全体に黒い。
- 1b 黄褐色砂質土 (10YR3/3) サビ多い。赤色絞を含む。炭化物あり。
- 1c 黑褐色砂質土 (10YR2/2) 粘性わずかにあり。サビあり。炭化物をやや多く含む。1号周溝。
- 2a 黑褐色粘質土 (10YR3/1) 粘性あり。茶色、白色粘土のブロック多く混じる。葉形多い。
- 2b 黑褐色砂質土 (10YR3/1) サビを含まない。炭化物、黄色絞を含む。
- 3 黑褐色土 (10YR3/1) サビに強い。黒褐色粘土がブロック状に混じる。泥炭状。
- 4 天然褐色砂質土 (10YR4/2) 地盤固着。黒褐色粘質土がブロック状に混じる。黄母を含む。
- 5 天然褐色砂質土 (10YR4/2) 黑色、白色ブロック、雲母を含む。粘性弱い。
- 6 黑褐色砂質土 (10YR3/1) 茶色、黑色ブロックを含む。黄母を含む。粘性弱い。
- 8 黑褐色砂質土 (10YR3/2) 茶色、褐色ブロックを含み、やや褐色味がある。粘性なし。

図8 1号周溝墓と周辺

試掘2号トレンチ内 方形周溝基溝断面 土層説明

- 1 黄土
- 2 明赤褐色土 表土
- 3 黑褐色土 表土
- 4 灰茶褐色土 灰色土、黑色土が板状に混じる。鉄分が沈殿する。種くよくします。試掘1号 sondage, 試掘2号 sondageの壁上。
- 5 灰黑色土 4層よりも鉄分多く沈殿。しまり強い。遺物を含む。
- 6 茶褐色土 黒色土、灰白色土が板状に混じる。炭化粒をわずかに含む。種くよくします。遺物を含む。
- 7 灰褐色砂質土 砂粒を多く含み、灰色土、褐色土がブロック状に混じる。
- 8 灰黑色砂質土 灰色土、黑色土が薄くレンズ状に堆積する。砂粒を部分的に混入。
- 9 黑褐色土 灰色土、白色土を含む。炭化粒、焼土をわずかに含む。しまりよい。
- 10 黑色土 深色土、茶褐色土をブロック状に含む。炭化物、焼土を含む。船形やあります。しまりあり。
- 11 黑色粘質土 灰色土、黑色土をブロック状に混入。しまりやあります。
- 12 黑色土 灰色土、白色土を含む。しまりやあります。
- 13 灰白色砂質土 地山側

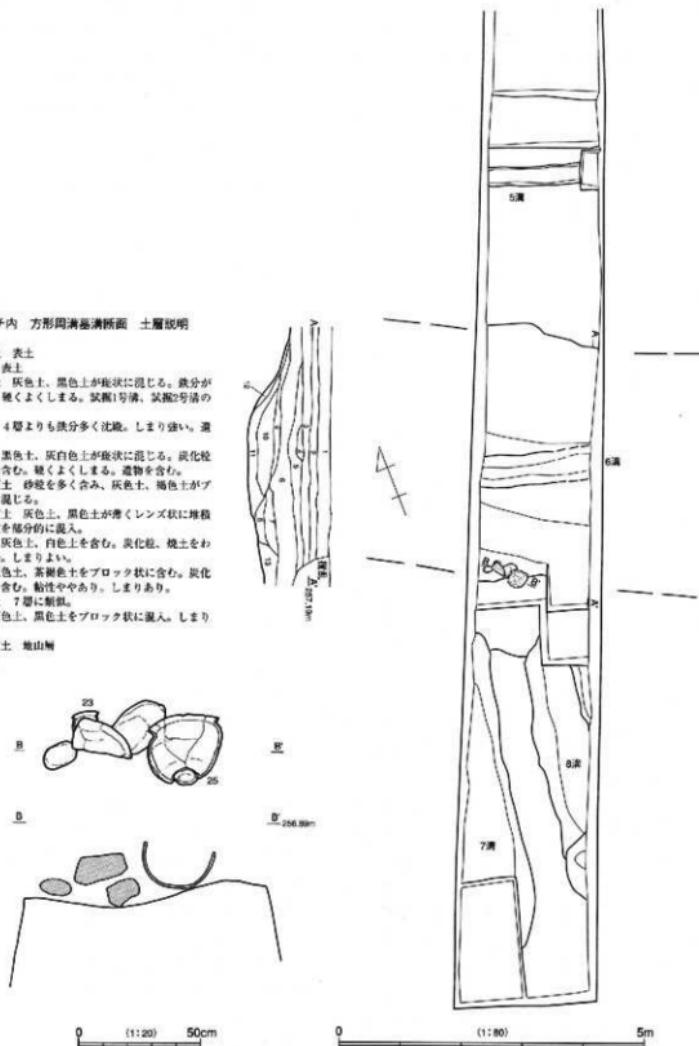


図9 試掘坑（2号トレンチ）

で、その状況からきわめて新しい坑と判断した。変色部については当初、溝かと考え、北壁断面で掘り込みを確認しようとしたが、溝断面を確認することはできなかった。のちの聞き取りでは畠と宅地境に相当することから、杭は畠境の柵列かと思われ、変色部は上層に地境の溝があつて何らかの要因で変色したものと推測できる。同様な変色部は調査区内地に点在したほか、戦後と考えられるごみ穴が調査区北西隅をはじめ中央付近に複数箇所あり、昭和30~40年代ころのガラス瓶、食器類などの廃棄物が埋められていた。また溝状変色部東側には廻い犬と思われる骨1体分も出土している。調査区北西寄りには井戸が1基あり、鉄管を垂直に打ち込んだ状態で発見され、上層からは関係する器材、パイプが出土した。井戸は20年くらい前に地元の渡辺戸戸工業所で掘削したもので、50~80mの深さで打ち込んであるといふ。

南半には試掘1号溝の続きとして底面が平らな溝が検出され、南端が直角に東へ曲がることがわかった。溝は2号トレレンチ試掘4号溝に向かっていることから、方形周溝墓の溝であろうと推測できた。溝内最下層には、黒色の自然炭化（泥炭化）したような植物質の堆積物（カヤカ）が全面的に覆っている。方形周溝墓の脇には斜めに3号溝が重複し、高壙、堀などの土師器がまとまって出土した。また2・4号溝が周溝に重複する。ピットは周溝墓周辺で1~4号ピットの4本、北西部分の下層で上層状ピットを含めて5~10号ピットの6本が検出されている。次にそれらの詳細について述べる。

1号周溝墓（1号溝）A2・B2・C2グリッド。幅3.5~4.2m、長さは調査区内では13.2m以上、試掘4号溝からさらに東へ伸びていることから、1辺15.5m以上の溝で、おそらく1辺20m程度の方形周溝墓と思われる。周溝墓の主軸方向はN·35°Eで、溝の幅は北西辺が約4mと広く、南西辺は幅25mとやや狭くなっている。南東隅付近に溝で囲まれた周溝墓内側（方台部）の一部が見えている。周溝墓の方台部は現地表土0.7mで、溝底面とは54cmの比高差がある。溝断面は内側が緩く、外側が急で、底面は平坦である。断面は圓のとおりで、確認面から溝底面までは60~70cm、溝底面の幅は2.5mではほぼ水平である。基本的には薄い2a層を挟んで上層が1層（1a~c層）、下層が3層で、1層は暗褐色砂質土、2層は黒褐色粘土質土、3層は黑色粘土層である。とくに3層は植物が黒色化した粘土質で、細かい纖維質であることはわかつたが、種実などの自然遺体、人工的な木製品などは皆無であった。分析は実施していないが、印象としてはカヤ等の

植物の葉の堆積が自然炭化した層と思われる。3層は溝内を全体的に覆っている。土師器などの遺物は1層上層から中層にかけて小破片が多く、3層にも少ないとながら小破片が見られた。また1層中層（1b層）には馬齒と考えられる齒の列がハの字状に造存し、馬の下顎あるいは頭骨が埋葬された可能性がある。そのほか四肢骨の破片と思われる歯骨片等が溝内南端付近で出土している。周溝墓の時期を示す資料はありませんが、1・2層中心に古墳時代後期の土師器が出土し、構築時期はそれ以前と考えられる。甲府盆地の事例では古墳時代後期以降の周溝墓はほとんどなく、古墳中期までとされていることから、本遺構は古墳時代中期以前の可能性が高い。

2号溝 A2グリッド。調査区南東隅。N·12°E。幅30cm以上、深さ8cm、長さ4.3m以上で、調査区東端に重複し、調査区外に伸びている。遺構外遺物などから推測すると古代末、または近代以降と思われる。

3号溝 B1~C3グリッドに直線的に伸びた溝で、方形周溝墓と重複する。遺物の時期から判断すると、3号溝のほうが新しいと思われる。N·59°E。幅約1m、深さ7~11cm、長さ8.6m以上。溝内には完形に近い高壙、堀などの大型破片が溝底に沿うように並んで出土した。

4号溝 B1グリッド。E·15°S。幅80cm、深さ46cm、長さ1.6m以上。周溝墓のコーナー付近に接続する。重複関係は不明。位置としては5号溝へつながり、断続的、直線的に東西方向に伸びた溝かもしれない。また2号溝とほぼ直交することから、2号溝と時期的に関連することが考えられ、何らかの区画溝の可能性がある。遺物は古墳時代後期と思われる土師器がやや多くある。

5号溝（試掘1号溝）2号トレレンチに直交するように検出された。E·18°S。幅35cm、長さ1.5m以上、深さ16cmで、包含層の上層に構築されている。4号溝に連絡する可能性もある。遺物は古墳時代後期と思われる土師器が少量ある。

6号溝（試掘2号溝）試掘4号溝上層検出の溝で、幅50cm、長さ1.8m以上、深さ8cm。E·15°S。周溝墓の溝中央、上層に同一軸線で重複する。遺物は古墳時代後期から平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器片があり、溝の時期は平安時代か。

7号溝（試掘3号溝）周溝墓溝に直交するように南北に位置する。N·15°E。長さ5.5m以上、幅1.2m以上、深さ3cm。南端には擾乱坑が重複する。遺物は古墳時代後期の土師器片がやや多く、須恵器蓋片もみられる。

8号溝 2号トレレンチ南側にあり、7号溝と平行する

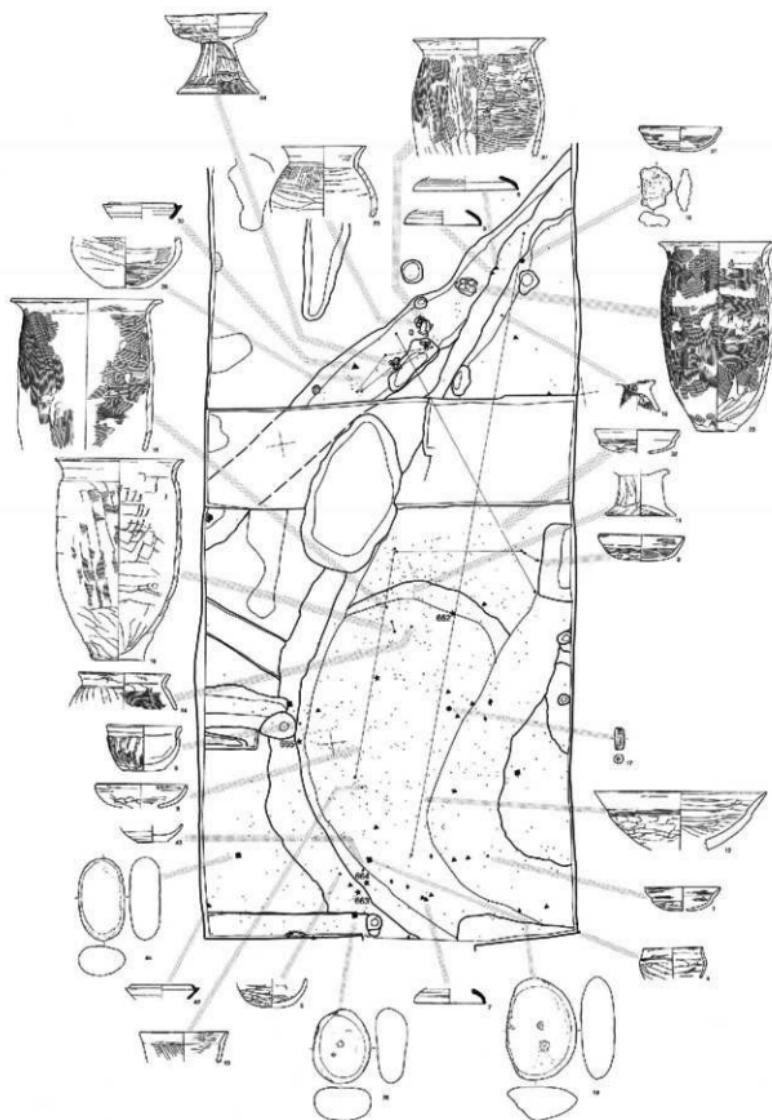


図10 遺物出土状況(1) 数字(662~665)は骨取上げ番号

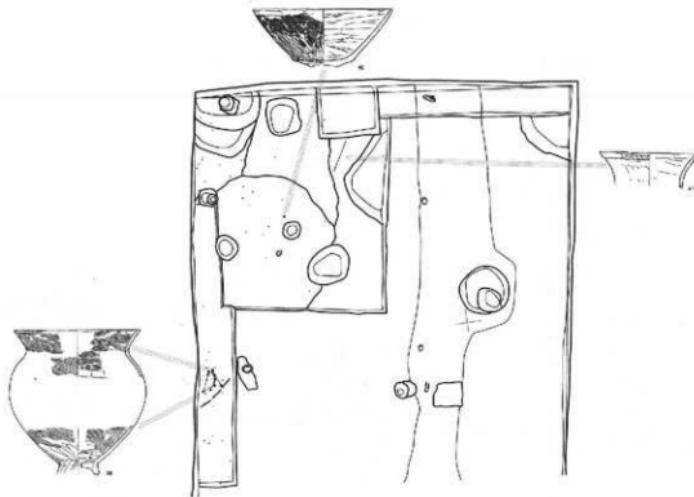


図11 遺物出土状況(2)

溝状の落ち込み。N-9°-E。長さ3.5m以上、幅0.9m、深さ5cm。

1号ピット A2グリッド。調査区南壁沿いに設定したサブトレンチ内で検出。径25cm、深さ11cm。遺物は古墳時代後期の土師器片が少量ある。

2号ピット B1グリッド内、4号溝と周溝の接点にあり、長軸径60cm、深さ47cmを測る。遺物は古墳時代後期と思われる土師器、須恵器片が少量ある。

3号ピット A1グリッド内、調査区南壁サブトレンチ内で壁にかかるようにして検出された。径60cm、深さ3cm。遺物は時期不明の土師器片が1点ある。

4号ピット C2グリッド内、3号溝脇より検出。径55cm、深さ20cm。

5号ピット E2グリッド下層。調査区北壁脇。径60cm、深さ10cm。

6号ピット E2グリッド下層。径40cm、深さ6cm。調査区西壁沿いのサブトレンチ脇。

7号ピット E2グリッド下層。径30cm、深さ11cm。

8号ピット E2グリッド下層。径75cm、深さ11cm。

9号ピット E2グリッド下層。やや大きな落ち込みで、径15m、深さ8cmで、完掘していない。

10号ピット 調査区西壁サブトレンチ内。径30cm、深さ35cm。

11号ピット(試掘1号ピット) C1グリッド内、1

号トレンチで検出された。径50cm、深さ9cm。12号ピット(試掘2号ピット) B1グリッド内、1号トレンチで検出された。径30cm、深さ11cm。

#### 第4節 遺物(図12~15)

1号周溝墓溝内(1~20)、1号周溝墓内出土と考えられる2号トレンチ試掘坑溝内(21~25)、2号トレンチ試掘坑(26~30)、1号溝(31~38)、北側下層(39~41)がある。

1号周溝墓からは2号トレンチ試掘坑内で25の球形甕(25)と小腹甕(23)が近接して出土し、溝の覆土中層から長胴甕が出土したほかは、溝の覆土上層から中層にかけて、土師器小破片を生じて出土している。1~3は土師器壺、4~6は土師器椀(または鉢)、7~9は須恵器蓋、10は土師器小型甕(瓶か)、11は土師器台付甕あるいは高杯脚、12は高杯、13は土師器高杯または鉢、14~16は土師器甕、17は土鍤、18は錫体、21~25は試掘坑内、周溝墓溝内出土遺物で、21は須恵器壺、22は土師器高杯、23・25は土師器甕、24は土師器杯である。1・2の杯は口縁部が外反し、体部境の屈折は弱く、口唇部がわずかに内済する。森原編年4段階(6世紀末~7世紀初頭)である。3は屈折のない杯で、器高は1・2同様に低い。4・5はほぼ同形で杯系の胎土をもつ椀で、底部は丸底である。6は小型

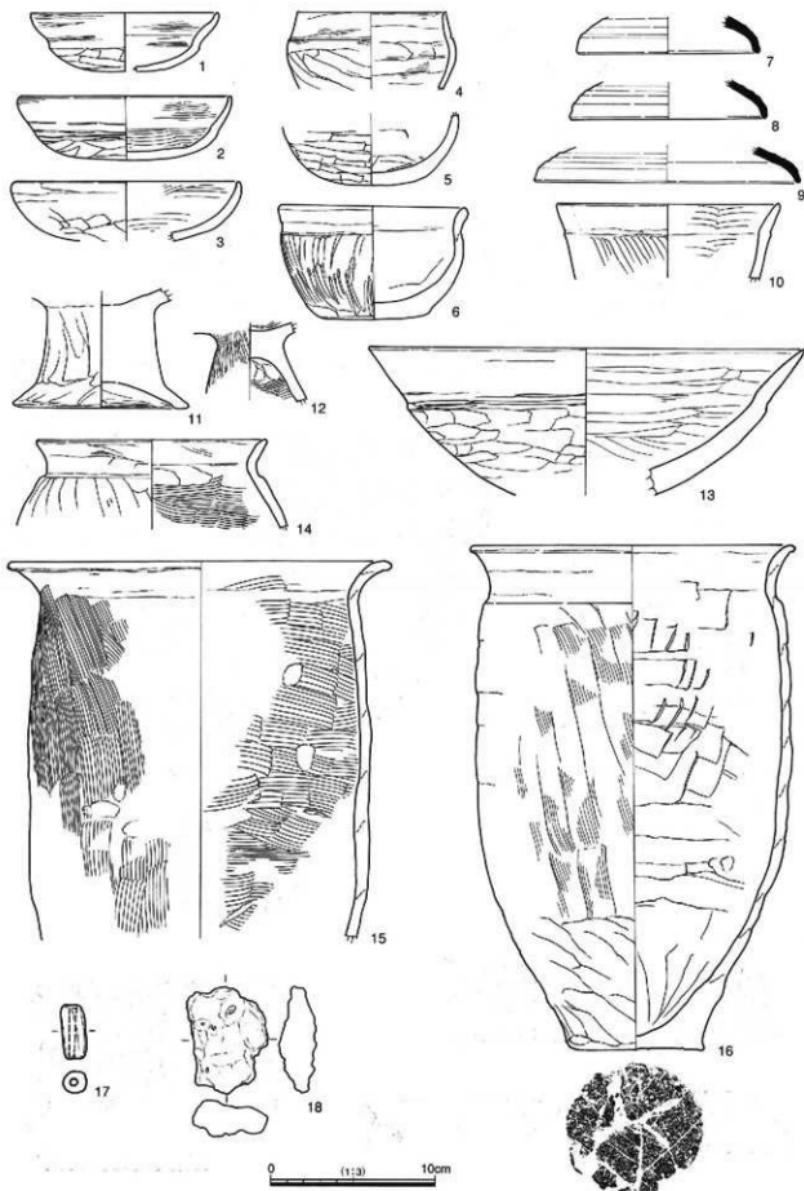


図12 遺物 (1)

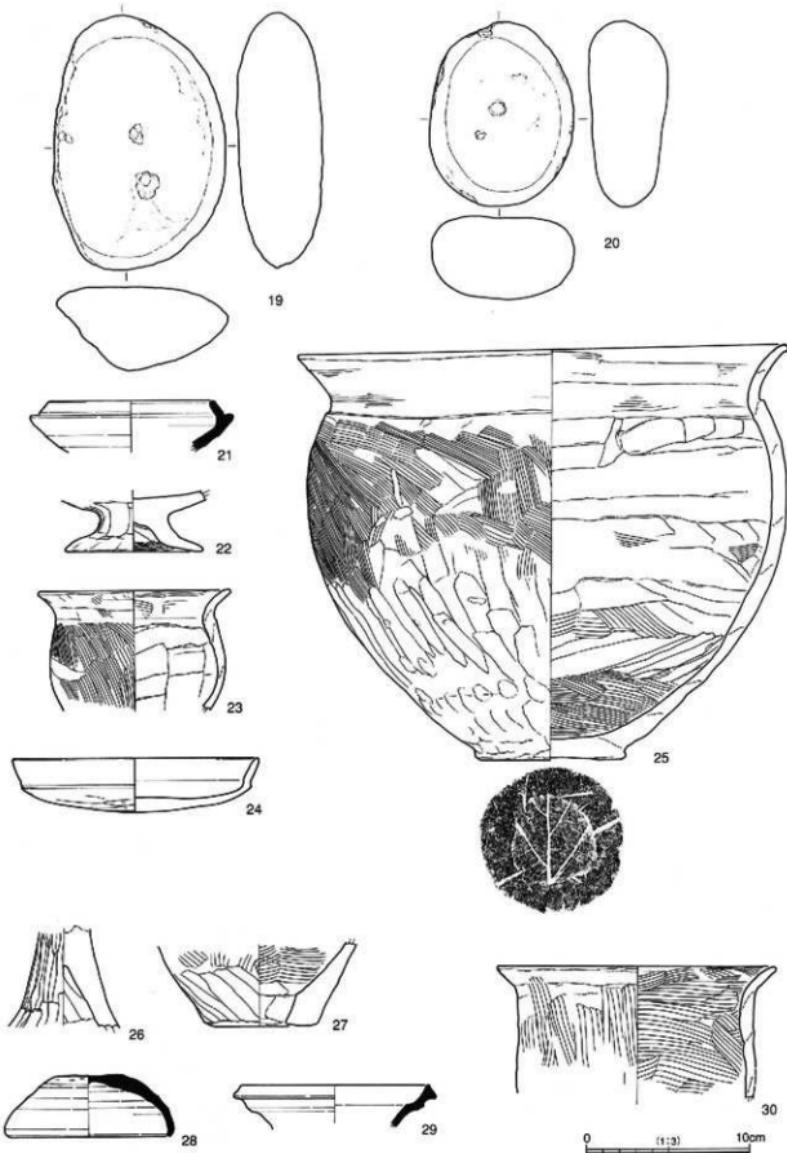


図13 遺物 (2)

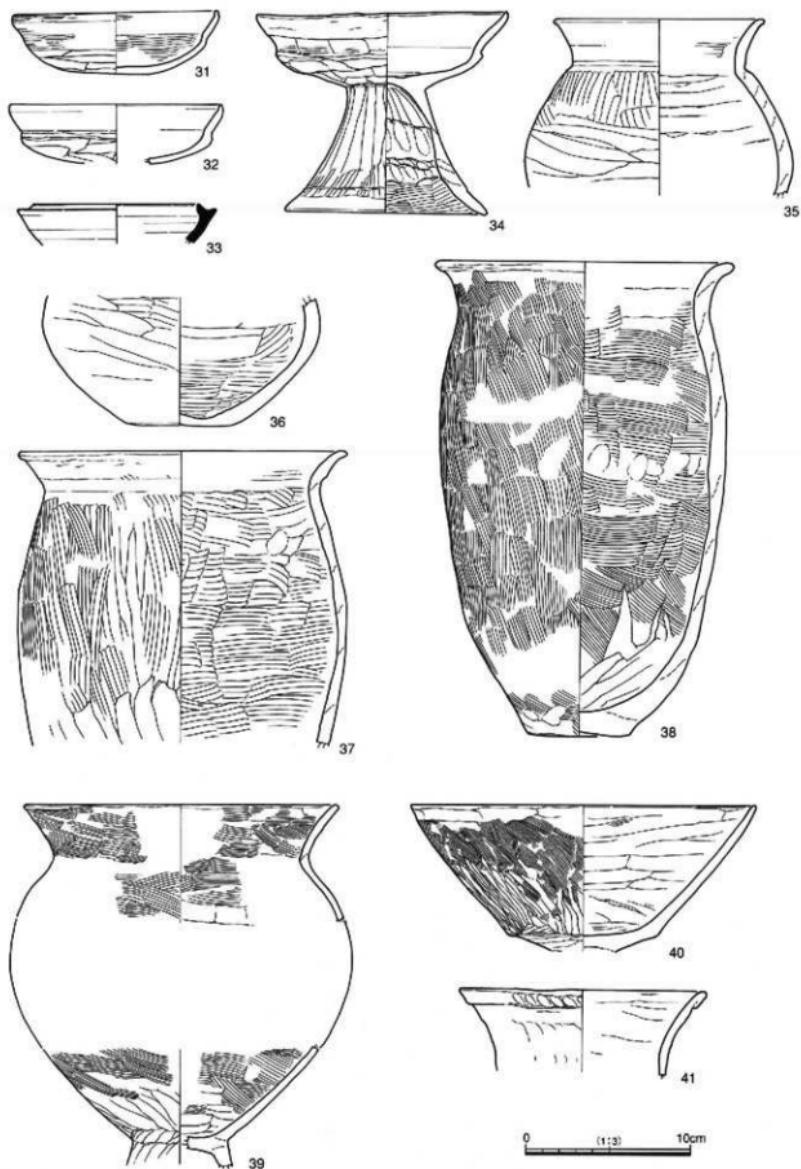


図14 遺物 (3)

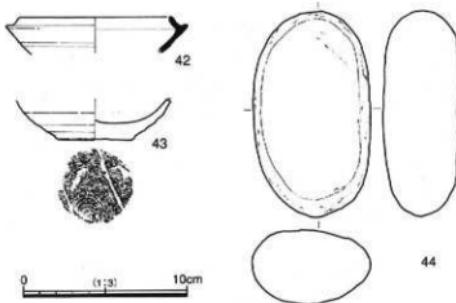


図15 遺物(4)

の壺に似た形態で、底部平底、体部外面はハケメ整形、胎土は壺系である。7~9は返りのない壺で、口縁部は開き気味である。10は径が小さく、小型なことから壺ではなく、瓶であろう。11は壺系の胎土の脚で、台付壺かと思われるが定かではない。12は脚の3箇所に角張った小さな貫通孔があく高壺。13は大型の高壺、あるいは鉢。15は長胴壺で、口縁部が緩やかに丸く開く。16の長胴壺はハケメの線が弱く、ヘラナデに近い。18は焼成粘土塊で、スサ压痕があり、壁上などの壁体片と思われる。19・20は中央にごく浅い小さな凹みをもつ叩き石で、側縁には敲打痕がある。21は受けをもつ須恵器壺蓋片。22は短脚の高壺で、7世紀前半か。23は体部が丸い小型壺で、大型の25と口縁部形態などが類似する。25は体部上半をハケメ、下半をヘラナデ整形した丸い壺で、口径は大きい。底部は縁に粘土の輪を貼付したような上げ底状を呈し、木葉痕が2重に付着する。森原編年3段階の6世紀後半か。24は他の壺類に比べて古手で、口縁の立ち上がりがきつく、6世紀後半代、森原編年3段階である。内面黒色処理され、外面はピンク色に近い赤色をほぼ全面的に施す。このように、遺物の時期では6世紀後半代から7世紀前半までみられるなかで、6世紀末から7世紀初頭がやや目立つ。出土層位が中央から上層で、周溝墓の年代を示す確実な遺物はなく、ほとんどは埋没過程での流入と思われるが、ここでは1号周溝墓の時期を一応6世紀後半以前とみなしておく。

26~30は、2号トレンチ内出土で一部周溝墓溝内出土と思われるが、試掘のため出土位置は明確ではない。25は土師器高脚、27は土師器瓶底部、28は須恵器蓋、29は須恵器壺、30は土師器壺。27は底部に径4cmの隅丸方形の孔をもつ壺で、底は厚く作られている。28は

体部が丸い壺で、口縁部は立ち上がりがきつく、7~9よりも古手である。29は小型壺あるいは壺の口縁部。30は小型の長胴壺。

1号溝では、1号周溝墓に近い地点で溝底に並べたように土器が出土している。31・32は土師器壺、33は須恵器壺、34は土師器高壺、35~38は土師器壺。31・32は1・2とはほぼ同時期と思われる壺で、口縁部は端部がわずかに内湾して開き、31では体部下半のヘラケズリの高さが下がる傾向を示す。7世紀初頭から7世紀前半(森原編年5段階)か。33は受けの立ち上がりが非常に短い壺身で、7世紀前半。34はほぼ完形の高壺で、壺部の形態は口縁が大きく開き、31・32のような壺の形態と類似する。

脚部はハの字状で、屈曲がほとんどなく、内面には輪積み痕を残す。7世紀初頭~前半の特徴をもつ。35・36はほぼ同じ形態と考えられる壺に近い球胴壺で、35の口縁部は丸く開く。37・38は長胴壺で、ともに口縁部が丸く外反し、頸部は緩やかなS字を描く。内外面にハケメを用い、7世紀前半の特徴をもつ。37の内面にはモミ痕がある(写真図版6参照)。以上の土器群の様相から、7世紀前半代のまとまりといえる。

39~41は調査区北側の下層から出土した土器で、浅い溝状、あるいは旧河道状遺構出土である。39は土師器台付壺、40は土師器高壺、41は土師器壺である。39は球胴で口縁部が開く台付壺。小破片化してまとまって出土したが、接合できなかった破片が多い。内外面にはスス、オコゲが付着し、煮沸に用いられたことがわかる。40は高壺で目の細かいハケメ整形のうち、ヘラミガキによって体部下半を仕上げている。口縁部は直線的にハの字状に長く伸びる。41は折り返し口縁をもつ口縁部で、2重に貼付した上に指頭圧痕を押す。器形は不明であるが、台付壺かもしれない。これらは弥生末から古墳前半に位置づけられる。

## 第5節 遺構外遺物

須恵器壺(42)、土師質土器壺(43)、磨り石(44)がある。42は受けの立ち上がりが短く、6世紀末~7世紀前半か。43は11世紀代と思われる壺で、底部は糸切のままである。44はごく弱い磨り面をもつ磨り石。

## 第6節 獣骨類

前記したように、1号周溝墓溝内より主に4点の獣骨類が出土した(試料1~4)。出土地点は溝南側で、周溝南西コーナー部を中心に分布する。いずれも溝の

覆土中、溝底部より約50cm上からの出土である。

試料1（写真1） 現場での取上げNo.662。ウマの下顎白歯列である。左右の白歯列は、90°以上にハの字状に開いて同一レベル面で検出され、出土位置からみて両者は同一個体であると思われる。歯は一部破損するものの、おおむね保存状態はよい。歯の大きさから乳歯で、若い個体と推定される（西本豊弘氏ご教示）。上顎骨は未確認であることから、頭骨から分離した下顎骨のみが削溝中に廻棄されたものと想定される。時

期は周辺の土師器から古墳時代後期か。

試料2（写真3） 取上げNo.663。長さ14cm、幅3.2cmの四肢骨片で、種別は不明であるが、獸骨と考えられる。非常にろく、遺存状態は悪い。

試料3（写真3） 取上げNo.664。4.5×3cmの非常にいろいろ骨片。種別、部位は不明。

試料4（写真4） 取上げNo.665。10×4cmの非常にいろいろ骨片で、種別、部位は不明。



写真1 試料1 (1)



写真2 試料1 (2)



写真3 試料2



写真4 試料3



写真5 試料4

表2 土器類觀察表

固形番号	地點	種別	器種	口径/底径/高さcm	像形	色調	胎土	注記・備考
15 1	1号周清墓	縦縫	井	(11.4) / - / 3.6	ナゲ・ヘラケズリ・ミガキ	赤土	赤土	No. 281. 内面朱色刷
15 2	1号西清墓	縦縫	井	13.0 / 7.5 / 3.9	ナゲ・ヘラケズリ	明褐色	赤土, 灰褐色	No. 316, 368, 399, 527, 1房
15 3	1号西清墓	井	井	(13.6) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ, 鎌文	赤土	赤土, 灰褐色, 小字款	No. 304, 509, 外面黑色付
15 4	1号周清墓	縦縫	井	(8.8) / - / -	ナゲ	赤土	赤土, 角	No. 172. 外面墨付瓦
15 5	1号西清墓	井	井	- / 3.6 / -	ナゲ・ヘラケズリ・ナゲ	赤土	赤土	No. 305. 赤土
15 6	1号周清墓	縦縫	井	(11.0) / 6.5 / 6.9	ナゲメ・ナゲ, 瓶底ヘラケズリ	赤土	赤土, 黑	No. 360. 内面黑色
15 7	1号西清墓	直縫	井	(16.9) / - / -	ナゲ	青	青	No. 372.
15 8	1号周清墓	直縫	井	(11.8) / - / -	ナゲ	青	青	No. 373.
15 9	1号周清墓	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ	白	白	No. 374.
15 10	1号西清墓	直縫	小型罐	(13.4) / - / -	ナゲメ・ナゲ	赤土	赤土	No. 381.
15 11	1号西清墓	直縫	台付井	(10.6) / - / -	ナゲ	赤土	赤土, 白, 内壁	No. 304. 高井付
15 12	1号周清墓	直縫	高杯	- / - / -	ナゲミ・ナゲ, ヘラケズリ	赤土	赤土, 白	No. 717. 高杯井孔2箇所
15 13	1号西清墓	直縫	井	(26.4) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土, 黑	No. 392, 710. 口縫内面墨スリ付
15 14	1号周清墓	直縫	井	(13.8) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土, 黑	No. 370.
15 15	1号周清墓	直縫	井	(23.4) / - / -	ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑	No. 366.
15 16	1号西清墓	直縫	井	(18.7) / 6.0 / (31.0)	ナゲ・ナゲ, 木葉彫	赤土	赤土, 白, 黑, 雪黒	No. 484, 380. 内外全体墨色
15 17	1号周清墓	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・四輪ヘラケズリ	灰褐色	赤土	灰褐色2トーン4連
15 18	1号周清墓	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	灰褐色2トーン4連
15 19	1号西清墓	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	灰褐色2トーン4連
15 20	1号周清墓	直縫	井	(11.8) / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色1トーン4連, 内面墨色, 外面米色
15 21	1号西清墓	直縫	井	(12.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色1トーン4連, 内面墨色, 外面米色
15 22	1号周清墓	直縫	井	(22.9) / 25.5 / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連, 2トーン3, 体部外向白斑
15 23	1号西清墓	直縫	井	(22.0) / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連, 2トーン3, 体部外向白斑
15 24	1号周清墓	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 25	1号西清墓	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 26	2号トレシヤ	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 27	2号トレシヤ	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 28	2号トレシヤ	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 29	2号トレシヤ	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 30	2号トレシヤ	直縫	井	- / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	灰褐色2トーン4連
15 31	分縫	直縫	井	12.5 / - / 9	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	赤土, 黑, 白
15 32	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 33	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ・ナゲ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 34	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 35	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 36	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 37	分縫	直縫	井	(16.0) / - / -	ナゲ・ヘラケズリ	灰褐色	赤土	No. 89. 分縫
15 38	1号清	直縫	井	(18.0) / 6.0 / 29.3	ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	No. 243. 内面アクリ付茎, 外面墨斑
15 39	1号清	直縫	台付井	(19.0) / - / -	ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	No. 762, 764, 766, 768, 770, 772, 774, 777, 779, 781 ~ 785, 789, 790, 792, 793, 795, 内外削痕
15 40	東縫外	高井	井	(21.0) / - / -	ナゲ・ナゲ・ナゲ・ナゲ	灰褐色	赤土, 黑, 白	No. 719.
15 41	東縫外	1号鉢	井	15.0 / - / -	ナゲ・西山墨	灰褐色	赤土, 黑, 白	No. 241. 山田繪模似, 外面墨, 花紋?
15 42	東縫外	復元	井	- / - / -	ナゲ・西山墨	灰褐色	赤土, 黑, 白	72, 236, 268, 武都口トレ
15 43	東縫外	小身	井	(9.1) / - / -	ナゲ	白	白	No. 243. 1号压模, 外面墨斑
15 44	東縫外	土師質	井	- / 4.0 / -	ナゲ・高須泥	灰褐色	赤土, 黑	No. 7.

( )は推定値、胎土の雲は雲基、長は長石、石は石英、赤は朱色、白は白色、黒は黑色粒の略

表3 土製品觀察表

固形番号	地點	種別	器種	口径/底径/高さcm	像形	色調	胎土	序号	注記	備考
12 17	1号周清墓	土師	井	3.3 / 1.4 / 1.3	ナゲ	灰褐色	赤土, 白	5	No. 585.	
12 18	1号周清墓	焼成粘土塊	井	6.4 / 1.9 / 2.3	棒状土灰	明黄色	赤土, 白, 黄	37	No. 688.	極上状

表4 石器觀察表

固形番号	種別	石材	色調	重量g	注記	備考			
13 19	研磨石	安山岩	赤灰	970	No. 659.	1面に扱い跡有り			
13 20	研磨石	安山岩	赤灰	610	No. 661.	1面・側面に磨打痕, 1面にスリ?			
13 21	研磨石	安山岩	赤灰	590	No. 212.	底部に擦打痕			
14 40	東縫外	高井	井	-	-	-			
14 41	東縫外	1号鉢	井	-	-	-			
15 42	東縫外	復元	井	-	-	-			
15 43	東縫外	小身	井	-	-	-			
15 44	東縫外	土師質	井	- / 4.0 / -	ナゲ・高須泥	灰褐色	赤土, 黑	No. 7.	

## 第4章 総括

本遺跡からは、朝氣遺跡としては初となる方形周溝墓が1基確認された。これまでの調査では、弥生末～平安時代の竪穴住居が数地点で検出されるなど大規模な集落の広がりが推定され、生産基盤としての水田跡も一部で発見されている。墓としては弥生末の土器棺墓、平安時代と考えられる伸展葬人骨を伴う土塚墓が検出されているが、古墳時代の墓は未発見であった。

今回発見された方形周溝墓は、全体を調査したわけではなく、コーナー部分を含む一部分が明らかになつたに過ぎず、埋葬主体部付近も未調査であるが、試掘で確認された溝とのつながりから1辺20m程度の方形周溝と考えられ、溝の断面形態から方形周溝墓と認定した。ブリッジ（隣接部）の有無は定かではないが、南西隅には明らかにないことから、南辺中央にブリッジをもつタイプか、あるいは溝が全周するタイプ、または1箇所あるいは対角線のコーナーにブリッジをもつタイプと考えられる。県内の方形周溝墓（低墳丘墓）について整理した中山誠二・清水博・宮澤公雄氏によれば、弥生後期前葉から中葉の出現期には4つのコーナーにブリッジをもつタイプが多く、次いで弥生後期後半から古墳初期頭には対角線のコーナーにもつものが主流となり、古墳前期頭から中期にかけて1辺中央に持つタイプ、全周タイプがみられるという。古墳後期には消滅するとされている。

1号周溝墓からは、1・2層に伴い古墳時代後期の土器類が出土したが、溝底面からは出土遺物が少なく、時期が明確ではない。平面形態を推測するならば全周、あるいは中央ブリッジの可能性があり、古墳時代中期と考えるのが妥当であろう。ブリッジに面した溝内からは供献された土器が出土することが多いが、2号トレンチ内出土の球頭甕はその可能性があり、南辺中央付近にブリッジが存在した可能性を示唆している。

周溝墓に関し、溝底面近くの全面で確認された泥炭状の自然炭化層の存在が注意された。炭化物の分析は実施できなかったが、おそらく水辺に多く繁茂した葦などの植物と考えられ、溝内が湿潤で自然炭化を促す環境にあったことを物語っている。また溝の中層から馬歯、骨が出土している。馬歯は乳歯で、下顎に配列した形で溝の中央に遺存しており、周辺の上器の様相から古墳時代後期頃に周溝を中心とした頭骨廻棄あるいは祭祀、または埋葬が行われたことが考えられる。

方形周溝墓と重複する2号溝からは甕、高杯がまとめて出土した。方形周溝墓を切る溝と思われ、溝の

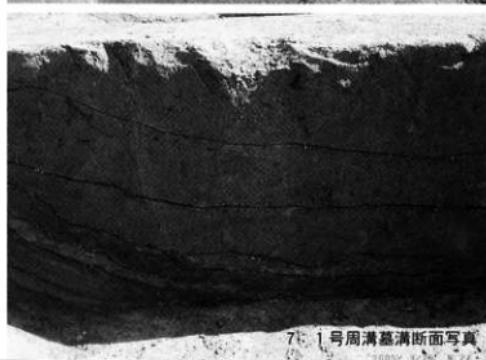
方向も周溝とは異なることから、朝氣遺跡で以前に検出されている各種溝と同様に、用水路などの溝かと思われる。また調査区北西隅では、下層から溝状の浅い落ち込みが検出され、古墳前期あるいはそれ以前の土師器、上器類が集中的に出土した。その性格は不明で、上器廻棄遺構、あるいは溝、または竪穴の一部の可能性も考えられる。

今回の調査地点が朝氣遺跡全体の中でどのような位置にあるのか、定かではないが、集落中心部からはずれた墓域の一角であった可能性がある。これまでの調査の実態が必ずしも明らかでなく、本調査区の評価も難しいが、こうした調査の積み重ねにより朝氣ムラの様相が明らかにされていくものと考えられる。

最後になりましたが、調査にあたり(株)西甲府住宅、(有)ミサワには埋蔵文化財調査に対するご理解、ご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。また甲府市教育委員会の適切なご指導のもと、調査に参加された方々のご協力により無事調査が終了したことに対しまして、厚く感謝いたします。

### 引用参考文献

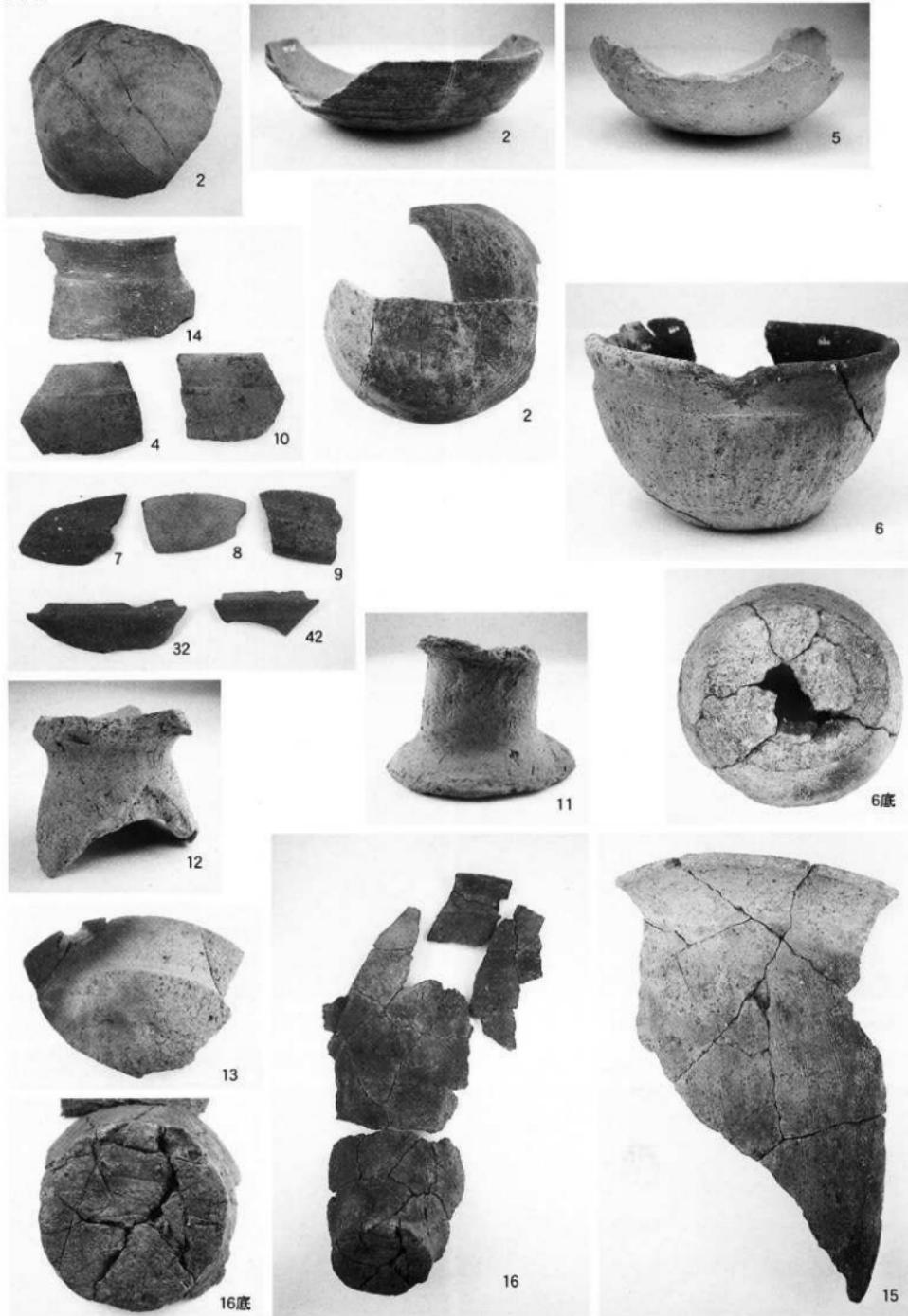
- 谷口一夫・坂本美夫・長沢宏昌・保坂康夫 1980 「朝氣遺跡 東小学校付近の土師器遺跡発掘調査報告書」甲府市教育委員会  
山梨県考古学協会 1983「山梨の遺跡」山梨日日新聞社  
伊藤祐仁 1989「朝氣遺跡」『甲府市史 史料編 第1巻 原始・古代・中世』  
萩原二郎 1991「盆地の開発と集落の展開」『甲府市史 通史編 第1巻 原始・古代・中世』  
磯貝正義 1991「甲府市域の都配置と都城の設定」『甲府市史 通史編 第1巻 原始・古代・中世』  
甲府市教育委員会 1992「甲府市遺跡地図」  
信藤祐仁 1998「朝氣遺跡」『山梨県史 資料編1 原始・古代1 山梨県』  
中山誠二 1999「方形周溝墓と円形周溝墓」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』  
清水博・宮澤公雄 1999「方・円形周溝墓」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』  
甲府市教育委員会 2004「甲府市内遺跡I」甲府市文化財調査報告書  
甲府市教育委員会 2005「甲府市内遺跡II-平成6年度試掘調査報告書」甲府市文化財調査報告書29

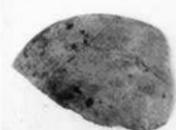
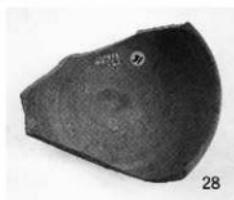
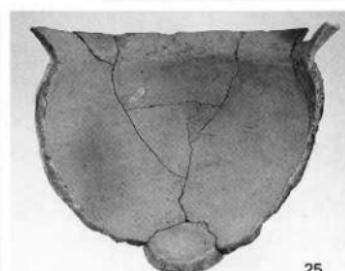
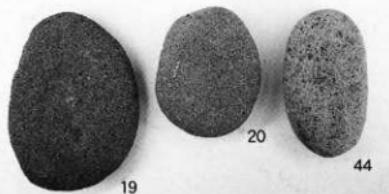


図版 2



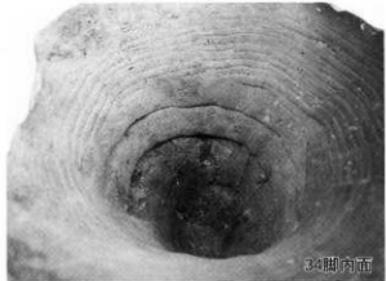








34



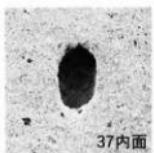
34脚内面



35



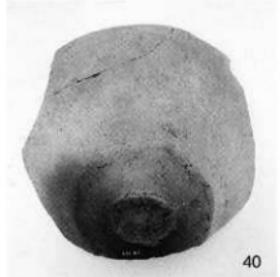
37



37内面



38外面



40



38



38底



40



41



43

報告書抄録

フリガナ	アサケイセキ(ダイサンジュウヨンジ)						
書名	朝氣遺跡(第34次)						
副題	西甲府住宅地點 発掘調査報告書						
シリーズ名	甲府市文化財調査報告34						
著者名	柳原功一						
発行者名	(株)西甲府住宅・甲府市教育委員会・(財)山梨文化財研究所						
編集者名	(財)山梨文化財研究所						
住所・電話番号	(財)山梨文化財研究所 〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL055-263-6441						
印刷所	帝京サービス						
発行日	2006年3月31日						
朝氣遺跡	所在地	山梨県甲府市朝氣1丁目229-1ほか					
	1/25,000 地図名・位置・標高	「甲府」 北緯 35° 39' 09.6" 東経 138° 34' 56.3" 標高 257m					
遺跡概要	コード	市町村	遺跡番号	調査原因	宅地分譲地開発	調査面積	137.6m <sup>2</sup>
		19201	121				
	主な時代	古墳時代後期					
	主な遺構	方形周溝墓・溝・ピット					
	主な遺物	土師器壺・高杯・杯・須恵器壺ほか					
	特殊遺構	方形周溝墓					
特殊遺物	馬齒						
調査期間	2005年3月11日～3月31日						
要約	古墳時代後期以前と考えられる一辺約20mの方形周溝墓1基のほか、古墳時代後期の溝などを検出し、古墳時代前期にさかのほる包含層の一部を確認した。						
FD添付の有無	無						

なお緯度・経度は世界測地系データに基づく数値である。

---

甲府市文化財調査報告書 34  
朝氣遺跡（第34次）  
—西甲府住宅地點 発掘調査報告書

平成18年（2006）3月31日 発行

編 集 (財)山梨文化財研究所  
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

発 行 (株)西甲府住宅・甲府市教育委員会・(財)山梨文化財研究所

印 刷 (株)帝京サービス

---

